追手門学院大学社会学部紀要
2024 年 3 月 22 日，第 18 号，23-36

コロナ禍の祭礼行事における諸実践

― 2022 年度諏訪大社御柱祭を事例として ―

石　川　俊　介

Various Practices in Festival Events During the COVID-19 Pandemic

― Case Study on Suwa Taisha Onbashira Festival in 2022 ―

Shunsuke ISHIKAWA

要　約

本論は「コロナ禍」において、2022（令和 4）年度諏訪大社御柱祭がどのように行われ、関係者がどのような対応をしたのかについて、現地調査と資料調査から論じるものである。

コロナ禍における自粛開催、または中止された祭礼行事に対する研究は既に数多く発表されている。神事に代表される宗教的な目的に直結する行事と、機械などに置き換えられない手作業に関するものは従来通り実施されたが、行事を介して感染を広める危険性がある、人が長時間密集する行事や作業は中止されたり、人力から重機の使用に置き換わったりするという一般的な傾向が明らかにされている。他方で、感染対策の隙間を縫うように行われた、一部の参加者による「非公式」な実践についても報告されている。

諏訪大社御柱祭は江戸時代から多くの見物客を集める、長野県を代表する祭礼行事である。2022 年の祭りは従来通り開催される予定であったが、幾度かの感染拡大の影響により、衆目を集める主要行事が中止されることとなった。

他方で、神社役員の主導で代替行事が実施されたり、参加者が自主的な行事を行ったりした。コロナ禍におけるこのような諸実践を記述することは、祭礼行事の在り方を見直すことにつながるだけでなく、人が集まる行事をいかに開催するかという視点からコロナ禍という社会状況を記録することにもなると考えられる。

キーワード：コロナ禍、祭礼行事、代替行事、自粛開催、諏訪大社御柱祭

はじめに

いわゆる「コロナ禍」と呼ばれた新型コロナウイルスの感染拡大は、社会活動全般に大きな影響を与えた。多くの祭礼行事が従来通りの方法での開催を断念し、中止や部分的な開催などに切り替える対応をとった。2023年5月以降、行動規制が緩やかになり、祭礼行事やイベントの開催は「4年振りの通常開催」の文言とともに、マスメディアで報道されるようになった。あたかもかつての日常が戻ってきたかのようだ。

長野県諏訪地方で2022年に行われた諏訪大社御柱祭（以下、御柱祭と表記）は数えで7年毎に行われる式年祭である。コロナウイルスに対する知見が蓄積されるなかで、見学の自粛や参加者の事前の健康観察などを条件に開催された。しかしそれは従来の内容とは程遠く、多くの行事が中止・変更されたものであった。

1. 本論の目的と問題の所在

本論は「コロナ禍」という社会状況において、2022年諏訪大社御柱祭がどのように行われ、参加者がどのような対応をしたのか、その一端について論じるものである。

2019年末にその存在が確認された新型コロナウイルス（COVID-19）は、翌2020年には日本国内にも広がり、多くの感染者を出すこととなった。2023年12月現在、感染症に対する科学的な知見が蓄積されたこともあり、その影響は一時期よりも小さくなったと言えるが、未だに続いている。

その根本的な対策は集団感染を防ぐことである。密集、密接、密閉という「三密」の状況が生じないようにすることが求められた。ただ、「これに照らすと、祭礼行事は密の条件がそろってしまうことになる（太田　2023b 183）」と指摘されているように、祭礼行事は「共同作業」を前提として行われるため、人が密集する状況が避けられない。したがって、中止や開催方式の変更を強いられるなど、イベントや式典と同様に大きな影響を受けた。特に2020年から2021年にかけては、全国の祭礼行事における神輿や山車、屋台の曳行などのほとんどすべてが中止され、神事のみの開催が続くこととなったことで、行事の継承が懸念されることにもなった（太田　2023b 183）[1]。

筆者は、諏訪大社上社の御柱祭に奉仕する担当地区「金澤・富士見」を構成する、富士見地区を主な調査対象としている。御柱祭は数えで7年に一度、寅と申の年に行われる諏訪大社の式年遷宮祭であり、社殿の一部と御柱と呼ばれる柱が更新される。2016年の祭りには観光客を含め

1　本論でも述べるが、コロナ禍の祭礼行事においては、密集する時間を短くするという目的から、作業工程の見直しや行事内容の簡略化といった対応が見られた。これらの実践は今後の祭礼行事運営のノウハウとして蓄積されたと考えられる。

て約 150 万人が訪れたとされる。御柱祭の特徴は、最大で 10 トン以上の重さの御柱に綱を取りつけ、人力で曳く「曳行[2]」だ。加えて、御柱を坂から落とす「木落し」や、川に御柱を落として対岸に渡す「川越し」が多くの見物人を集める。

2022 年は従来通り開催される予定であったが、幾度かの感染拡大の影響によって多くの準備行事が中止となり、4 月と 5 月の本番も自粛開催となった。筆者は現地調査[3] を実施したほか、電話や電子メールなどを適宜用いて氏子組織の役員らへの聞き取りを行った。加えて、新聞記事などの資料検索を行った。

2. 先行研究の整理

新型コロナウイルスのまん延を理由とした自粛開催、または中止された祭礼に対する研究は既に数多く発表されている。それらの多くは祭礼関係者の実践を論述するものである。

八木は京都祇園祭の目的を「疫病の原因と考えられた悪霊たちを御旅所に集め、神の霊力でその威力を削ぎ、都の外へ送り出すこと（八木　2022 12)」と論じたうえで、2020 年の山鉾巡行・神輿渡御が中止されたことに対応して、神輿の代わりとなる神籬（ひもろぎ）の渡御が行われたことを報告している（八木　2022 14-15)。疫病払いという宗教的な目的を達成するかたちを模索した結果として実行されたものと解釈できるだろう。

酒井は、「担い手の意識が向いている対象」という視点から、神社祭礼などの宗教的行事を大きく 2 つの場面に分けて論じている。ひとつは、祭事において担い手の意識がヒトに向けられている場面を指す「神賑行事」。もうひとつは担い手の意識がカミに向いている場面である「神事」である（酒井　2023 62)。

栃木県栃木市都賀町家中にある鷲宮神社の 2020 年の例大祭は、「午前中の神事と午後の神賑行事に分けられており、カミに向けた神事は実施されたが、ヒトに向けた神賑行事にあたる（酒井 2023 70)」行事は中止されたという。その理由として、「高齢の担い手たちの安全を考慮し開催を見合わせたことがわかる。同時に、家中外からも多くの観客を呼び込むからこそ、クラスターの発生が及ぼすであろう多方面への影響が懸念されたことも想像に難くない（酒井　2023 70)」と指摘している。ここでの神事とは、神前での拝礼、献撰、祝詞奏上、玉串奉奠であると推察される。同様に、栃木県日光市の行岡神社大祭を調査する松田は、2020 年、2021 年の行事は神社への祝詞奏上のみ実施だったとしている（松田　2023 53-54)。

太田は、2022 年に開催された、諏訪大社を含む複数の長野県内の御柱祭についての調査から、祭りで行われたことを「守られたもの」と「置き換えられたもの」の 2 つに分類している（太田

2　人力やトラックでの運搬などの方法を問わず、曳行と呼ばれることが多い。
3　距離を取るなどの配慮をしながら、短時間のインタビューも実施した。また、本論は主に諏訪大社上社の行事について論じている。

2023a 1、太田　2023b 188-194)。守られたものとは、神事をはじめ守られる理由があるものと手作業が必須なものである。飯田市上村の程野正八幡宮の御柱祭では、「神社から置き場へ御神輿が御柱を迎えに行き、御柱はその神輿に先導されて曳行されるが、その行列も通例通りであった(太田　2023b 188)」という。

ここまで見てきたように、祭礼行事のなかの宗教的な目的に関わる神事（宗教儀礼）は実施され、それに付随する付け祭りや風流、余興と呼ばれるような行事は、参加者だけでなく多くの見物人を集めると見越して中止されたと考えられる。このような対応は広く見られるものではないだろうか。

また、御柱の伐採する際、周囲の小石を除去するなどの作業や、立地条件や境内の広さの関係で重機やトラックなどが使用できない時は、これまで通り人力で行わざるを得なかった（太田　2023b 189）という。加えて、重機による曳行になった場合でも木遣り唄は歌われたと太田は指摘している。木遣り唄は御柱を曳行する際などに歌われる仕事歌であり、祭りにはなくてはならないものだ。人力から重機などに担い手が変わっても「その役割を果たしていたことが印象の残った（太田　2023b 191)」としている。

置き換えられたものは、感染拡大の恐れがある判断されたものであり、大人数の人手を要するもの、時間がかかるものであり、曳行をはじめとする御柱の移動や運搬の方法であった（太田　2023a 1、太田　2023b 191)。しかし、すべてが置き換えられたわけではない。4本のうちの2本は重機、2本は人力でなど、曳行の一部のみが置き換えられた祭りもあった。御柱は重機で運ばれたが、人力で曳行されるはずだったコースを旗や御幣をもった氏子たちが歩いて神社に向かうという祭りも見られた（太田　2023b 193)。祭りによって事情は違うだろうが、できる限り従来通りの形式を残すという実践だったと考えられる。

他方で、従来通りの開催時間・場所以外での実践も見られた。三隅は兵庫県内のいくつかの祭礼行事に関連して行われた、役員などのコアメンバーによる実践について論じている。それらは批判を回避しつつ実施する「インフォーマル」な実践であり、「遊び」「練習」「試し」などと呼ばれていた（三隅　2022 204）という。従来の行事日ではない日に、様々な理由をつけ、参加者を絞ったり実施時間を短くしたりするなどの工夫をし、「行事の本番ではない」と暗に主張する言葉を用いることで、代替となる行事を実施したとみなすことができる。

加えて、コロナ禍における研究ではないが、森田は長崎県長崎市の長崎くんちで行われる行事「ウラくんち」について以下のように論じている。

> 長崎くんちの権威化あるいは観光化によってくんちに疎外感をおぼえるとき、それをくんちに関連する場面で解消しようと試みる。すなわち、「祭りから疎外された感じをいだく周辺的な祭り参与者はそれを昇華させるために自分たちの祭りを求める」（中略）のである。
>
> 既成のフォーマルな祭りの枠組みでは吸収しきれない人びとの欲求があっても、それを処

理できる受け皿がうまく用意されるなら、オリジナルな祭りに付随してウラ祭りという一種の風穴のような祭りが生まれてくる（森田　1990 112-118）。

上記の指摘は、コロナ禍の祭礼行事にもあてはめて考えることができるのではないだろうか。次章で御柱祭の概要について述べたのち、2022 年の御柱祭の開催内容について概説する。

3. 御柱祭概説[4]

諏訪と諏訪大社

諏訪は、長野県のほぼ中央部、南信地域に位置している。県内で最も大きな湖、諏訪湖があるこの地域は、西から岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市、原村、富士見町といった 3 つの市、2 つの町、1 つの村から構成されている。湖の周囲は温泉地として知られ、蓼科中央高原や八ヶ岳中央高原は別荘地として人気がある。また、総人口約 19 万人のこの地域は精密機械メーカーが集まる工業地帯でもある。

諏訪湖の南北には、諏訪大社の上社と下社がある。上社は本宮（諏訪市）と前宮（茅野市）、下社は春宮（下諏訪町）と秋宮（同）から成り立っている。諏訪大社は全国に点在する諏訪神社の総本社で、日本最古の神社のひとつとされる。諏訪大社の祭りに奉仕するのは、諏訪地域に住む人々（氏子）だ。上社の奉仕地域は諏訪市の湖南、四賀、豊田、中洲地区と茅野市、原村、富士見町で、下社の奉仕地域は岡谷市、下諏訪町、諏訪市の上諏訪である。なお、金澤地区は茅野市、富士見地区は富士見町にある。

御柱祭

諏訪大社の御柱祭は、寅と申の年、数えで 7 年毎（6 年周期）に開催される式年遷宮祭だ。境内にある 2 つの御宝殿のうち 1 つが新しく建てられ、そこに収蔵品が移される。御宝殿の建設に伴い、その周囲に設置された木製の柱、いわゆる御柱が更新（交換）される。かつては、全ての社殿が建て替えの対象だったが、室町時代以降、規模が縮小し御宝殿と御柱だけが対象となった。江戸時代以降、御柱の更新が祭りの主要行事となり、それが御柱祭と呼ばれるようになったと言われている。御柱は各宮に 4 本、計 16 本が建てられている。

御柱は最大で 20 メートル以上、重さは 10 トンを超える巨木である。御柱として使用される樅の木は、上社・下社の伝統的な調達地から伐採される。上社は八ヶ岳山麓の御小屋山の社有林、下社は東俣の国有林からだ。伐採された御柱は、出発地点までトレーラーで運ばれる。その後、御柱を立てる「建て御柱」までのほとんど全ての過程が人力で行われる。

4　御柱祭全体の詳細については拙著（石川　2023）を参照。

御柱祭の前半部分は 4 月に行われる山出し祭だ。その中心的な行事に木落しと川越しがある。木落しは、上社・下社の双方で行われ、御柱曳行の過程で実施される。この行事では、氏子たちとともに御柱が急な坂を下る。御柱の落ちるスピードの速さと坂の急さから、非常に危険性が高いとされる。特に、規模が大きい下社の木落し坂は、長さ 100 メートル、最大斜度 35 度、平均でも 30 度以上の急坂である。

川越しは上社のみで行われる行事で、雪解け水が流れる川幅 10 メートルほどの宮川に御柱を入れ、山出し祭の終着地である御柱屋敷近くの対岸まで引き渡す。後述するが、御柱を清める意味があると解釈されており、氏子たちも御柱とともに川を渡る。この行事もまた、その規模と壮観さから見る者に強い印象を与える。

これらの行事は御柱祭の象徴とされ、氏子組織の技術と結束力が試される機会となっている。しかしながら、宗教的な意味は必ずしも明確ではない[5]。酒井の言う「ヒトに向けた神賑行事」に該当すると考えられる。

後半部分は 5 月に行われる里曳き祭で、かつてはこちらのみが御柱祭と呼ばれていたとされる。山出し祭と比べて難所が少ないため、氏子たちの表情は穏やかに見える。御柱が進む道路や神社の周辺では様々な芸能が披露され、春の陽気も手伝って、華やかな雰囲気だ。氏子たちが名残を惜しむ中、御柱はそれぞれの宮の境内に恭しく建てられ、祭りは終幕を迎える。

4. コロナ禍の御柱祭

「人を見るなら諏訪の御柱」

上記のように、御柱祭はそのほとんど全ての過程を諏訪地域の氏子の人力によって行う祭りである。金澤・富士見地区の場合、特定の役を持った氏子だけでも約 1,000 名[6]、当日だけ参加する老若男女の氏子も合わせると約 2,000 名とされる。これだけの大規模な集団が御柱とそこから伸ばされる曳き綱（長いもので 300m ほど）に取り付けば、必然的に参加者同士の距離は近くなり、体を寄せ合いながら作業を行うことになる。

他方で、御柱祭は江戸時代に高島藩の後ろ盾を得て華美化が進んだこともあり、周辺からも、中山道などの街道を通って遠方からも、多くの見物人を集める祭りとなった。御柱そのものが全く見えず、「人を見るなら諏訪の御柱」と言われるようになったほどだ。特に見物人が集まる下

5　御柱を神霊などが宿る依り代であるとみなすことはできないなど、御柱の意味については諸説紛々である（石川　2023 118-123）。そのため、山出し祭で行われる行事の意味も不明確だ。行事が続けられる中で参加者や研究者が後付け的に意味を創造してきたと考えられる。上社の木落しと川越しについては不明だが、下社の木落しがはじまったのは早くとも 1872（明治 5）年と推定される（石川　2023 284）。

6　2010 年の富士見町富士見地区御柱祭典委員会の資料には 617 名と記されている。富士見地区は茅野市金澤地区と担当地区「金澤・富士見」を構成し、上社の御柱 1 本の曳行から建て御柱までに奉仕する。金澤地区の資料はないが、両地区で役をもつ氏子の総数は少なくとも 1,000 名程度と推測される。

社の木落しでは、2010 年と 2016 年、会場となる木落し坂周辺に入場規制が敷かれるほどであった。このように、野外で行われる行事とはいえ、不特定多数の見物人が訪れることや、氏子たちが共同飲食をすることも考慮すると、この時点での新型コロナ感染対策において避けるべき実施内容であったと考えられる。

以下では、新聞記事と筆者の調査から、2022 年御柱祭の準備から開催までの過程を見ていく。

見立て行事と伐採式

御柱祭の開催方法について、諏訪大社と上社・下社の氏子の代表によって構成される大総代会は、感染対策との擦り合わせ[7] をしながら検討を進めてきた。用材を伐り倒す伐採式などの準備行事も含め、参加人数を絞って実施するという方針を決めた。

伐採の前に仮見立てと本見立てという 2 回の見立て行事が行われる。これらは氏子に御柱用材を披露する行事である。かつては関係者と物好きしかいなかったとされるが、現在は多くの参加者を集める行事となっている。2004 年の上社の仮見立てには 1,200 名が参加した[8]。2010 年は伐採される山林の都合で各担当地区の人数が絞られたが、それでも 900 名が参加した（石川　2023 149）。2022 年にあたっては、上社の仮見立ては中止され、本見立てが 2021 年 6 月 9 日に行われた。参加者は諏訪大社神職と上社の大総代ら 40 名ほどだったという[9]。

上社の伐採式は、通例[10] とは異なり 2021 年 10 月 14 日と 18 日に御小屋山で行われた。こちらも神職、大総代のほか、伐採作業従事者のみに参加者を絞って実施された。14 日は約 150 名、18 日は約 100 名が参加したという。従来の伐採は 1 日で行われたが、一度の参加人数を少なくするため、2 日間に分けたとされる。3 月ではなくこの時期に伐採を行った理由として、感染状況には「波」があり、「仮に 3 月まで待って感染が拡大し、伐採できなくなった場合、御柱祭ができなくなる。感染状況が落ち着いたタイミングで伐採した」と大総代代表は話したという。なお、伐採用の斧を清める「火入れ式」等、伐採式に係る行事は参加者を絞りつつ通例通りに実施した[11]。

伐採式の日時については、大総代と伐採に従事する一部の氏子にしか知らされていなかったと

7　2021 年 3 月 17 日には、上社の大総代 31 名で構成される上社御柱祭安全対策実行委員会が、地元の医師を招き、新型コロナウイルスに理解を深める学習会を開いた（長野日報　2021 年 3 月 18 日）。

8　長野日報 2008 年 9 月 20 日。

9　長野日報 2021 年 6 月 10 日。この記事は、実施後に諏訪大社上社本宮で行われた会見の内容をもとに書かれていることから、本見立てには報道関係者が参加できなかったと推察される。また、開催日時は同年 4 月 30 日に行われた報道機関向けの説明会で「6 月中」とだけ伝えられていた（長野日報　2021 年 5 月 1 日）。

10　2016 年は伐採場所であった上伊那郡辰野町の横川国有林の積雪を考慮し、前年 2015 年の秋に実施されたが、2010 年以前は山出し祭直前の 3 月上旬から中旬に実施されるのが通例であった。2010 年は 3 月 11 日に北佐久郡立科町の山林で行われた。

11　長野日報 2021 年 10 月 19 日。

推察される。ある集落の区長（60代男性）は知り合いの大総代から「秋口には伐るぞ」と聞いていたが、正確な日時は教えてくれなかったという[12]。また、10月15日の新聞記事には伐採についてのものは見られなかった。このような「情報統制」も感染対策のひとつだったのだろう。

開催方法の決定

2021年11月16日、諏訪大社大総代会は「御柱祭実施に関するガイドライン」を発表した。長野県独自の感染警戒レベル[13]が4以上の場合、「氏子による曳行は行わず、機械力を導入して運搬する」との発言が報道機関向けの会見であり、トレーラーを使って御柱を輸送し、木落しなどの行事は中止とすると決定された[14]。

年が明けた2022年1月27日に発出された「まん延防止等重点措置」を受け、同年2月22日、諏訪大社と大総代会は、従来通りの人力による山出し祭（上社木落し・川越し、下社木落しを含む）を中止し、「機械力を導入」した山出し祭を開催することを決めた[15]。

後述する通り、御柱は2本ずつトレーラーに積載され輸送された。その経路は従来の曳行路から変更され、日程も従来の3日間から上社は1日間、下社は2日間に短縮された。また、氏子や観光客に対して見学を自粛するように要請があった。

その後、長野県では3月6日をもって「まん延防止等重点措置」が解除された。4月13日、諏訪大社上社御柱祭安全対策実行委員会は5月の里曳き祭を「氏子による曳行」によって行うと発表した。新型コロナウイルス感染症予防のガイドラインに則ったうえで、従来通りの人力による曳行と建て御柱を行うとした（太田　2023a 1、太田　2023b 185）。下社里曳き祭でも同様の対応がとられた。

上社8本の御柱は、1日間となった上社山出し祭において、出発地である綱置場（つなおきば）から安置場所である御柱屋敷までトレーラーで運搬された。氏子は御柱屋敷と近くの宮川河川敷で待機し、御柱を出迎えた。下社では2日間の日程で、出発地である棚木場（たなこば）から安置場所である注連掛（しめかけ）まで、トレーラーによって御柱8本が運搬された。上社とは異なり、氏子組織役員が徒歩でトレーラーに随行するかたちの曳行となった。

里曳き祭は上社・下社ともに人力曳行となったが、各担当地区が参加人数を制限し、見物はしないように要請があった。建て御柱では入場規制が行われ、氏子以外の観覧ができなかった。本

12　2021年10月初めに行った電子メールでの調査による。

13　県内を10の圏域に分け、直近1週間の人口10万人あたりの新規陽性者数、病床使用率などから設定されるものであり、レベル4で「医療警報」が発令された。
https://www.pref.nagano.lg.jp/hoken-shippei/kenko/kenko/kansensho/joho/corona-sengen.html（2022年10月8日確認、現在は削除されている）

14　信濃毎日新聞2021年11月17日。上社山出し祭が行われた4月2日時点では、レベル5（特別警報）であった。

15　長野日報2022年2月23日。

宮四の御柱を担当した金澤・富士見地区では、氏子かどうかを服などに貼られた「本宮四」のシールで判別していた。

なお、御柱祭の神事にあたる「御柱大祭（みはしらたいさい）」は、御柱の建て替えを神前で奉告するものとされる（石川　2023 92-93）が、従来通り上社本宮と下社春宮で催行された。

5. 自粛開催下での対応

2021 年 11 月 16 日に「御柱祭実施に関するガイドライン」が示されたのちも、担当地区の氏子たちは従来通りの御柱祭が実施されるとの想定で、曳き綱の材料の確保や曳行の練習を行っていた。本章では、上社のいくつかの準備行事と、上社山出し祭で行われた氏子らの実践について、現地調査と後日実施した聞き取り調査から論じる。

上社抽籤式

上社に奉仕する 8 つの担当地区の御柱担当を決める、2022 年 2 月 15 日の上社抽籤式は、抽籤くじを引く抽籤総代と大総代のみが参列して行われた。従来ならば担当地区の氏子数百人が境内を埋め、熱気のなかで行われる行事だが、今回は静粛な雰囲気の中で催行された。

上社木造り・綱縒り

御柱の伐採後、出発地で御柱を加工する作業を木造りと呼ぶ。曳き綱 2 本を取り付ける穴を開けるなどの加工をし、曳行できる状態に御柱を整える。綱縒りは綱打ちとも言われるが、材料となる藤蔓（根藤）や荒縄などから曳き綱を製作する作業である。2022 年 3 月 27 日に行われた金澤・富士見地区（本宮四担当）による両行事について述べる。

木造りはすべての行程を手作業で行う。ノコギリやノミ、チェーンソーなどを駆使して御柱を加工する。この行事は機械化することができないため、従来通りの方法で行われたと考えられる。他方で、参加者数を 50 名に絞ったほか、作業時間をずらしたり、作業する場所と場所の距離を空けたりするなどの工夫が見られた。2016 年は作業を見守る多くの氏子が見られたが、今回は見物について控えるように要請されていたため、周囲には氏子以外誰もいなかった[16]。それでも作業の合間には木遣り師による木遣り唄が歌われ、参加者の気勢を上げていた。

同じ時間に富士見地区では、同区の御射山神戸（みさやまごうど）集落で綱縒りの一部が行われていた。こちらは 130 名ほどの人員を二手に分け、一方は集落内の道路で曳き綱を製作し、もう一方は集落の神社境内にある倉庫で作業を行った。

16　綱置場には他に 7 本の御柱が置かれていたが、この日作業していたのは本宮四のほか、本宮一と前宮四を担当する地区の計 3 つであった。富士見地区の役員によると、人が集まらないように日程調整が行われたという。

2016年に元綱係[17]の役員を務め、今回も同じ係として参加している氏子によると、密になる状況を避けるため曳き綱の作り方を変更したという。従来は曳き綱となる3本の綱それぞれを製作する作業と、3本を合わせて1本にする「縒り」の作業を同日に行っていた。必要な人員が元綱係だけでは賄えないため、他の係の氏子に協力を依頼していた。対する今回は作業工程を分けて実施した。3本それぞれを事前に完成させておき、この日は縒りの作業のみを行なった。この変更によって、1回の作業時間が短くなっただけでなく、全ての作業を元綱係だけで終わらせることができたという。

他方で、前回元綱係の役員を務めた別の氏子の男性は、作業中はマスク着用と決まっているうえ、懇親会などの親睦をはかる機会がなかったため、お互いの顔がわからないまま本番に臨むことが不安だと語っていた。

沿道での見学と清祓い

2022年4月2日、上社の御柱を載せたトレーラー4台はそれぞれ綱置場を出発し、御柱屋敷に約45分をかけて到着した[18]。交通規制はされておらず、トレーラーの前方には白バイと誘導車、後方にはパトカーと地元ケーブルテレビ局の撮影車両が帯同していた。氏子らには見学自粛が呼びかけられていたほか、曳行路から近いJR茅野駅と上諏訪駅の改札口には、諏訪地方観光連盟御柱祭観光情報センターが、御柱祭に関する看板を設置していた。そこには、車両での御柱の運搬と、木落し・川越しの中止についての説明があり、「交通ルール、交通規制に従い、曳行路に立ち入っての見物はご遠慮ください」等の注意喚起が行われていた。他方で、上諏訪駅の改札前には、御柱祭のために作られたと思われる曳き綱が展示されていた。

従来の山出し祭との大きな違いは、御柱街道を通らないことであった[19]。御柱街道とは、茅野市と原村の境にある綱置場から、県道196号線などを通り、茅野市宮川の木落し坂まで至る道であり、御柱道とも言われる。なお、途中の茅野市玉川にある子之神の御旅所では、神職による清祓いが御柱に対して行われるのが通例である。

今回、御柱は綱置場を出発するとすぐに信号を右折し、八ヶ岳エコーラインを北へ進んだ。国道299号線、国道152号線、県道197号線を経由し、茅野駅近くの上川橋を渡った。その先の信号を右折し、木落しを終えたあとの従来のルートである県道16号線に入り、川越しが行われるはずだった宮川の河川敷を右に見ながら宮川橋の上で停止し「御柱清めの水かけ（後述）」を行った。その先の交差点を右折して、御柱屋敷に到着した。

17　曳き綱に取り付いて御柱を曳く係。曳き綱の製作についても中心的な役割をこなす。富士見地区では、20代から50代の男性が各集落から参加する。

18　御柱は2本ずつトレーラーに積載され、次の時間に出発した。本宮一・前宮一は9:30、本宮二・前宮二は10:30、本宮三・前宮三は11:30、本宮四・前宮四は12:30。

19　トレーラーの通行が困難な箇所があったためと考えられる。

筆者はまず、午前10時頃から20分ほど、国道152号線沿いの茅野市塚原一丁目信号付近において、御柱の曳行を見学した。見る限り約100人が歩道で見物していた。法被を着て地区の旗をもった氏子らしき人たちも見られた。茅野市のある地区の法被を着た男性によると、茅野市豊平の国道152号線沿いにある、農業・園芸資材専門店付近でお祓いが行われたという。

子之神区が保管し御旅所で毎回掲げられる「御柱御着所」の木札が設置され、同区の区長ら3名の氏子が参列し、停車したトレーラーの御柱に対する清祓いが行われた。この場所となった理由は、標高が子之神の御旅所とほぼ同じだったためとされている。また、多くの氏子が神事の様子を見守った[20]。

続いて、11時頃から1時間ほど、茅野駅近くの茅野町信号付近で曳行を見学した。こちらでも法被を着た人が沿道で見学していた。テーブルとイスを用意しているグループや、通り過ぎる御柱に対して木遣り唄を歌う人も見られた。300メートルほど離れた木落し坂の上には、カメラマン数人が陣取って写真を撮っていた。

御柱清めの水かけ

13時頃、本宮四・前宮四の御柱が宮川橋に到着し、橋の上で「御柱清めの水かけ」が行われた。この行事は、地元の茅野市消防団宮川分団の団員たちが、消防用のホースなどの機材を用いて宮川の水を御柱にかけるというものだ。地元宮川地区の大総代を中心として、トレーラー搬送でもできる御柱清めの方法を模索するなかで企画された[21]。

約2分間の放水で御柱全体に水がかけられた。橋の欄干には「御小屋[22]の大木　宮川の水で清めて　里曳きを待つ」と書かれた横断幕が設置された[23]。御柱の周囲には本宮四担当の金澤・富士見地区と前宮四担当の本郷・落合・境地区（いずれも富士見町）の氏子ら200人ほどが放水を見守っていた。役員以外は規制線の外にいたが、全員が祭り装束を着ており、富士見地区の氏子数名は御柱に取り付けるはずだった装飾物の一部を抱えていた。また、断続的に木遣り唄が歌われており、祭り本番を思わせる雰囲気があった。放水の直前には、「ここは川越だで　お願いだ」という歌詞の木遣り歌が歌われた。御柱の周囲にいた氏子にも水がかかっていたが、彼らはそれを嫌がることなく、威勢よく声を上げている様子が見られた。

放水が終わると御柱は氏子たちとともに御柱屋敷に向かった。数分で御柱屋敷に到着すると、クレーン車によって2本の御柱は吊り上げられ、指定された場所に安置された。それを見届けた氏子らは終了式を行い解散した。諏訪大社職員らによって御柱の周囲には注連縄が張られた。従

20　長野日報2022年4月3日。

21　長野日報2022年3月28日。

22　御小屋山を指していると考えられる。今回は、1992年以来30年振りに上社の御柱用材が御小屋山で伐採された。

23　長野日報2022年4月3日。

来ならば3日間かかる山出し祭は6時間ほどで終了した。

曳行路巡りと御柱の枝の曳行

翌4月3日午前10時頃、上社木落し坂を訪れると、上社担当地区Aの木遣り師14名、大総代[24]1名、役員の法被を着た4名の氏子に出会った。地区Aの木遣り係の有志の発案で、曳行路を乗用車数台で巡りながら、綱置場、木落し坂、川越し場（宮川河川敷）などで木遣り唄を歌っている最中だという。昨日の山出し祭には、4名の木遣り師しか参加できなかったため、そのフォローとして行っているそうだ。

10時45分頃、筆者が御柱屋敷を訪れると、地区Aのグループがやってきた。同地区の他の大総代3名も加わっていた。木遣り師たちは宮川を挟んで八ヶ岳側に3名、御柱屋敷側に11名に分かれ[25]、「川越し　ご無事で　お願いだ」「ここは　川越し　川渡し」などの川越しに係る歌詞を次々に歌った。大総代やその場に居合わせた人々が見守るなか、役員の法被の氏子が石をつけたロープを対岸に投げた。すると、そのロープにつながれた長さ1メートルほどの小型の御柱らしきものが宮川に引き込まれた。宮川に浮かんだそれは少しずつ引き寄せられ対岸に到達した。さらにロープで引っ張られ、地区Aが抽籤式で引き当てた御柱の前まで運ばれた。グループ全員が揃ったところで、大総代のあいさつ、御柱に向かっての拝礼、御神酒での献杯が行われ、最後に「山の神様　お休みだ」の歌詞の木遣り唄が歌われた。この歌詞は従来の山出し祭の最後にも歌われるものである[26]。曳行された小型の御柱は、伐採される際に採取された枝[27]でできた御柱の「分身」と語られていた。

6. まとめと考察

本論の目的は、コロナ禍の御柱祭においてどのような実践が行われたのかを明らかにすることであった。すべてについて論じることはできないが、上社山出し祭で観察された3つの実践について、どのようなアクター（要素）を集めて行われたかに注目しながら考察する。

まず、輸送中の清祓いは、従来の祭りにおける子之神の御旅所での清祓いの代替として行われたと考えられる。場所は異なるが、子之神区の氏子、「御柱御着所」の木札、諏訪大社神職などのアクターをそろえることによって実施された。なお、現在は停止して清祓いを受けるのみだが、かつては子之神に先頭の御柱が到達した時点で、御柱8本すべてのその日の曳行が打ち切り

24　諏訪大社大総代の着用する法被は、上社下社ですべて共通の紫地のものである。
25　従来通りの川越しが行われた場合の人員の配置だったと思われる。
26　木遣り唄と山の神の関係については拙著（石川　2023 238）を参照。
27　伐採された時点では担当地区が決まっていなかったため、枝は諏訪大社が保管していた。抽選式の後に担当地区に枝が引き渡されたという。

になったとされる[28]。

続く「御柱清めの水かけ」は、諏訪大社大総代会会員の発案によって、川越しの代替行事として実施された。御柱を川に入れるという行為を、水をかけるという行為に転換したものだろう。宮川の水、消防団員、放水器具、木遣り唄の歌唱、お清めという文言の入った横断幕などのアクターをそろえることによって、従来の川越しに近い意味をもった行事（儀礼）を作り出したと言える。この行事では「御柱を清める」という目的が明確に意図されているが、これまでの川越しが果たして「御柱を清める」という意味を持った行事だったかについては留保するべきである。

富士見地区のある集落の御柱祭役員経験者５名（内１名は元大総代）に話を聞いたところ、「清めといえば清めだが、これまであまり意識したことがない」など、明確な回答は得られなかった[29]。「川越しは御柱を清める行事」という解釈が、当事者間でどの程度共有されているかについてはさらなる調査が必要だろう。今回の企画のなかで「清める」という意味（機能）が再確認、または発見された可能性もある。他方で、曳行や木落しなどの山出し祭の主要行事が全て中止される中で、ひとつでも氏子が関わる行事を実施したかったという思惑もあると考えられる。

最後に、担当地区 A の氏子によって行われた曳行路巡りと御柱の枝の曳行は、山出し祭の翌日という規制のない時間帯に、氏子組織ではない有志によって自主的に、さらに「密」にならない少人数で、乗用車を用いて短時間で行われるという、感染対策を意識して行われたものである。彼らが語った通り、この行事は上社山出し祭に参加できなかったことを補う実践だったと考えられる。森田が論じた「ウラまつり」と安易にみなすことはできないが、参加資格を得られなかった人々による実践という点では共通する。御柱の「分身」として本物同様に木造りされた枝、ロープでの曳行と川越し、木遣り唄の歌唱などのアクターをそろえて行われた。

ここまで見てきたように、これらの実践はコロナ禍の祭礼行事をめぐって生まれた疎外感を昇華させるため、「自分たちの祭り」の開催を求めて行われた代替行事と考えることができるだろう。太田は従来通りの過程を踏んで行事を行うことが、「氏子の祝賀の表現に繋がる（太田 2023b 194）」と論じている。確かに、奉仕は人力という基本的な認識があるだろう。人力で行ってこそ「十全な祭り」と当事者は考えていると推察される。本論で記述した御柱祭についての実践も、代替行事で何かしらの祝意を示したい、という気持ちから行われたと言えるのではないか。あるいは、従来通りの行事を御柱に体験させてやれなかったことに対する、「後ろめたさ」から行われたと見るのは考え過ぎだろうか。

28　子之神は山と里の境界と認識されていると考えられるが、本論ではこれ以上論じることができない。
29　2022 年 10 月 23 日に行った合同インタビュー（座談会）より。

おわりに

祭礼行事は常に社会の影響を受けながら続いてきた。災害や戦災などの危機への対応と同様に、コロナ禍は祭礼行事の在り方を当事者が見直す機会にもなっただろう。これまでの経験の蓄積がコロナ禍での対応にも反映された可能性もある。

本論ではコロナ禍に行われた御柱祭についての調査報告を行った。観察調査と当事者への聞き取りなどによって、従来通りの参加者となれなかった人々が行事の現場やその周辺でどのような実践を行っていたのかを明らかにした。また、人が集まる祭礼行事をいかに開催するかという視点から、コロナ禍という社会状況を記録することにもなったと考えられる。今後は、コロナ禍を脱したなかで行われるであろう、次回 2028 年の御柱祭がどのように開催されるか注意深く見ていきたい。

引用参考文献

石川俊介
2023、今に向き合い、次につなぐ－諏訪大社御柱祭の祭礼民族誌、春風社
太田真理
2023a、コロナ禍中の御柱祭（2）－病と共存する祭り－、長野県民俗の会通信第 295 号、長野県民俗の会、1-6
2023b、松本平の御柱祭、鳥影社
酒井貴広
2023、地域とサイバー空間の相互作用に支えられる儀礼の文化的持続可能性－栃木県都賀町家中の鷲宮神社における強卵式の事例から－、原智章編、文化的持続可能性とは何か－文化のゆるやかな共鳴を捉えるために、ナカニシヤ出版、61-94
武田俊輔
2022、新型コロナ禍と祭礼行事、日本民俗学、310 号、99-109
松田俊介
2023、祭礼組織運営の人的課題と文化的持続可能性－栃木県日光市七里生岡神社大祭の事例から－、原智章編、文化的持続可能性とは何か－文化のゆるやかな共鳴を捉えるために、ナカニシヤ出版、35-60
三隅貴史
2022、祭礼と文化継承、コロナ時代の仕事・家族・コミュニティ－兵庫県民の声からみるウィズ／ポストコロナ社会の展望、鳥越晧之・足立重和・谷村要編、ミネルヴァ書房、195-212
森田三郎
1990、祭りの文化人類学、世界思想社
八木透
2022、祇園祭は疫病に負けたのか、KLK 特集シリーズ「祇園祭」編、KLK 新書、12-17